慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	地理学方法論の社会科学的基礎：地理学における理論構成と概念構成に関する一考察
Sub Title	Analytical foundation of methodology in Germany
Author	藤田, 弘夫(Fujita, Hiroo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1980
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.50, No.記念号 (1980. 11) ,p.687- 709
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	考古民族・ 地理 第五〇巻記念号
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19801100-0691

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

地理学方法論の社会科学的基礎

——地理学における理論構成と概念構成に関する一考察——

藤田弘夫

一　問題提起

地理学は雑多な知識の寄せ集めにすぎないのではないか、という疑問がもたれてきた。自己の研究過程で、何度もこのことを自問した経験をもつ研究者も少なくないであろう。

このことについて、クラヴァル（Paul Claval）は「今日の地理学に対する不安が存在している。他のものと同様に私はそれを感じる。同僚たちとそれについてさんざん話あったあげく、命題と帰結との悪循環の中に、自分が閉じこめられてしまっているのを感じるのであった」[1]というのである。こうしたことから、地理学に理論など成立しないのではないか、したがって、地理学の研究は「地域」の記述に徹するべきだ、といった極端な意見すらある。

また、地理学はその一貫性のなさ、地理学第一主義、そのあまりに細かいこと、何でも含む拡大主義を常に非難されてきた[2]。つまり地理学研究の曖昧さは、ことあるごとに指摘されてきたのである。しかし、もしかりに、地理学の「科学」の意義が意識的に論理的規範を基礎として、対象の「分析」と、これにもとづく「総合」とを意図するものであるとするなら、たとえ地理学が記述と不可分な関係をもつものであるにせよ、ただ単純で無自覚な「記述」として成立するとは考えにくい。だが一方で、現在の地理学が地理学理論とは一体どのようなものであるのか、という問いかけに、十分な答を用意

するだけの首尾一貫した体系的な理論をもつにいたっていないことも、事実である。この点ではラコスト（Y. Lacoste）の主張するように、他の科学がずっと以前から取り組んできた理論的な諸問題を、地理学が等閑視していた[3]、といわれてもしようがないであろう。

こうしたなかで、とかく理論的な問題を等閑視しがちなアングロ・サクソン圏にあって、ヘットナー（Alfred Hettner）の地理学を継承し方法論学者として不動の地位を築いていたハーツホーン（R. Hartshorn）に対する批判が生み出されていた。論理実証主義の影響を色濃くもったシェーファー（F. K. Schaefer）の「地理学における例外主義。その方法論的吟味」と題する論文は、その強い「法則科学」への指向によって、伝統的地理学とは異質のものだった[4]。彼の主張は戦後の地理学できわだった成果をあげたといわれる地理学の「計量化」と結びつき、ここに、バンジ（W. Bunge）、ベリー（B. J. L. Berry）、ハジット（P. Haggett）、ハーヴェイ（D. Harvey）等のいわゆる「ニュー・ジオグラフィー」が生み出されるのである。ハーヴェイはいう。「もし私が私の哲学を整えなかったならば、計量化の過程は私を袋小路に連れ込んだだけであろう[5]」と。

こうした研究傾向は漸次わが国に導入され、わが国の地理学にも多くの支持者を得ている。高橋・斉野・石川・石塚・杉浦等は戦後の地理学に革命的意義をもったといわれるこの計量革命を、「単に地理学的研究にさまざまな統計的推定や検定をともなう計量的諸技術の導入にとどまらず、いわゆる科学方法論の採用に基づく地理学の科学としての再編成を提唱したところに、その本来の意図があったと思われる」として、「いわば、それは地理学におけるパラダイムの変更を意図したものであり、本質的に地理学の哲学・方法論に関する問題提起であった[6]」というのである。つまり現在地理学は、経済学・政治学・社会学等とはいわば「一歩遅れた」かたちで、論理実証主義や科学哲学の影響にさらされているのである。

一方近年わが国においては、経済学・社会学等の隣接社会諸科学から「風土論」「地域論」といったかたちで、「地理的

なもの」への関心が高まっている。同時に地理学の内部においても、以上見てきたように再び方法論的な問題に目が向けられてきている。最近の方法論研究の関心がアメリカやフランスの地理学に集まっている点では、ドイツの地理学の圧倒的影響を受けた戦前とは若干事情を異にするものの、それだけに一層多彩な論点を提供しているといえよう。

こうしてみると、とかく「不毛な」という形容詞がつけられがちな「方法論の研究」を、地理学で行うことの、今日的意味は決して少なくないと思われる。現在、地理学が抱えるもっとも大きな課題の一つが、地理学理論の構築にあるといえよう。

本稿はこうした観点から方法論の問題を、従来のアプローチとはやや視点を変えて、地理的現実が他の社会諸科学において、どのように扱われているのかを探りながら、地理学理論構成上の諸問題を論じるところからはじめてみたい。

註

(1) Paul Claval, *Essai sur l'evolution de la géographie hummine*, 1965, クラヴァル　竹内啓一訳『現代地理学の論理』大明堂　昭和五〇　一頁

(2) J.Beaujeu-Garnier, *La géographie methodes et perspectives*, 1971. ガルニェ　阿部和俊訳『地理学における地域と空間』地人書房　一九七八　六頁

(3) Y.Lacoste, La géographie, *L'Histoire de la philosophie, idées, doctrines*, La Philosophie des sciences sociales, Sous la direction de François Chatelet, 1973., ラコスト　実川敏夫訳「地理学」田島節夫監訳『人間科学と哲学』シャトレ哲学史Ⅶ巻　白水社　一九七五　二五〇頁

(4) F. K. Schaefer, Exceptionalism in Geography: a methodological examination, *A. A. A. G.*, Vol. 43. 1953., シェーファー　野間三郎訳「地理学における例外主義・その方法論的吟味」野間編『空間の理論―地理学のフロンティアー』古今書院　昭和五一　一四―四七頁

(5) David Harvey, *Explanation in Geography*, Edward Arnold, 1969, ハーヴェイ　松本正美訳『地理学基礎論―地理学における説明―』古今書院　一九七九　九頁

(6) 高橋・斉野・石川・石塚・杉浦「地理学における『計量革命』の意味」『地理学評論』第四四巻　七号　一九七六　四二七頁

二　社会諸科学における地理的現実

もちろん社会諸科学は直接「地理」を研究対象とするものではない。しかしながら、社会現象には常に地理的側面が含

まれているため、社会諸科学はその自律的な理論体系の外枠に、なんらかのかたちで地理との関係を示す必要がある。それぞれの社会諸科学はその理論化にあたっては、当然のこととして社会の地理的現実を捨象してきた。換言するなら、このことによって社会諸科学の理論的純化が進められたのである。しかし一方で、こうした過程で捨象された地理的現実に新たな意義を認めるとともに、それぞれの社会諸科学の理論に論理的に組み込もうとする研究がくり返し生み出されてきた。しかしこうした研究が時として、それぞれの社会諸科学内で「地理学派」として成立することはあっても、決して大きな力とはなり得なかった。むしろ、それぞれの社会諸科学の枠からはみ出る社会現象の地理的現実は、「自然条件」の差異だとか「地理的条件」の相違だとかといった曖昧だが、強力な概念を使って説明してきた。(1)

では、それぞれの社会科学において、社会現象に含まれている地理的現実は、いかなる意味をもち、どのように位置づけられているのであろうか。われわれはまず、社会諸科学のなかでも経験科学として、もっとも理論化が進んでいるといわれる「経済学」をとりあげてみよう。

もちろん経済学が市場を媒介とした経済現象を研究の対象とし、このことによって絶えず新たな意義を見い出すことができるかぎり、経済学が「地理的なもの」を問う必然性はない。しかしながら、精緻に構成された近代経済学の理論体系にも、危機が忍び寄っているといわれる。ロビンソン（Joan Robinson）のいう一九三〇年代の危機に次ぐ「第二の危機」である。現代の経済学は理論の精緻化と裏腹に、現実の社会問題に対する適応力を失ってしまっている。近代経済学は自己に内在する論理をもってしては解決不能の外部不経済の問題を抱え込んでしまった。玉野井芳郎は経済学の危機の由来の一つとして、近代経済学が論理的支柱としてきた新古典派の理論が「領域の『一点集約』概念に依拠していて、そこでは〝広がりをもたない不思議な国〟の無意識論的世界が特徴的であった」というのである。新古典派経済学においては、「すべては市場メカニズムをとおして決定され、その市場も生産費に付加される運送費が無視される程度の私的な市場」なのである。「正統派経済理論は、市場経済または商品経済を対象の中核に据えて、〝広がりをもたない不思議な国〟

を舞台に理論を体系化してきたにすぎない」[2]というのである。

つまり新古典派経済学は経済現象の領域的広がりを捨象することで、高度に論理整合的理論構成を可能なものとした反面、このことによって社会的現実のきわめて重大な一側面を脱落させてしまった[3]。

これに対して、ドイツやフランスの経済学は経済現象の領域的な広がりを無視するものではなかった。リスト(F. List)にはじまるドイツ「歴史学派経済学」は、この領域を国家に求めるいわゆる「国民経済学」として成立したし、フランスの経済学もブローカル(Lucien Brocard)やマルシャル(André Marchal)に象徴的に見られるように、経済現象を単に原子化された個人の集合行動としてではなく、歴史的個性をもった地域集団の重層としてとらえている。たとえば、ブローカルの経済学は「局地、地域、国民(民族)国家、国際経済と次第に広がっていく同心円領域のなかでの人間相互の協同作業の分析から出発」[4]するのである。

しかし経済学の理論を、経済現象のもつ領域的差異を視野に入れたまま押し進めることは、経済学の理論がきわめて複雑なものとなるだけでなく、経済の概念そのもの自体の再検討をも要求した。したがって、ドイツやフランスの経済学はアングロ・サクソンの「価格」の理論に較べてきわめて粗雑な理論しか生み出さなかった。こうした傾向は地理的要因だけでなく、経済現象に含まれている歴史的・文化的要因に意義を認めれば認めるほど強まった。しかしここには、新古典派経済学によって捨象されてしまった不可欠な社会的現実としての経済現象の一側面が存在しているのである。

こうした事態はおおよそ近代経済学と対照的性格を示す「マルクス経済学」においても、決して無縁ではない。マルクス経済学において「地域」の問題は、その論理的支柱をなす「生産様式」の問題に深くかかわっている。なかでも、かつて活発な論争をひきおこしながらも政治的事情から中断され、近年フランスの『パンセ』誌の特集以後、再び脚光を浴びるにいたった「アジア的生産様式」の問題は、とりわけ注目に価する[5]。地理的なものへの関心からするなら、アジア的生産様式の問題は継起的な発展段階の一つとしてではなく、すぐれて地域的な類型として存在したかどうかをめぐって論じ

られるべきであろう。

現在マルクス主義社会科学において地理学は、アヌーチン(V.A.Anuchin)やシュミット＝レンナー(Schmidt-Renner)等によって組織的に研究が進められる一方、西側でもフランクフルト学派の気鋭の学者シュミット(Alfred Schmidt)によるマルクスの「自然」の概念そのものを、新たに検討しようとする野心的試みがなされている。[6] またわが国においても玉城哲や飯沼二郎等農業経済学の分野の研究者達から、この方面でのきわめて含蓄に富む問題提起を見ることができるのである。[7]

次に、かつてフランスで地理学と、その交錯する研究対象をめぐって方法論論争を行った「社会学」をとりあげてみよう。社会学が社会のトータルな認識を求めて体系的な理論を構成しようとする時、なんらかのかたちで社会的現実に含まれている地理的側面を位置づけなければならない。こうした立場から社会学の体系化を進めた代表的な学者が、デュルケーム(Émile Durkheim)であった。デュルケームは自己の社会学のなかに明確に、社会を「地理的なもの」との関連で扱う一分野として、社会形態学(morphologie sociale)を位置づけている。[8] この社会形態学をもってデュルケームは、当時隆盛を誇っていたラッツエル(Friedrich Ratzel)の地理学があまりにも多くの社会現象を地理との関連で説明しようとすることに対して、批判の口火を開いたのである。しかしブラーシュ(Paul Vidal de la Blauch)によって指導されたフランスの地理学はこうした方法論的な問題にはさほど関心を抱かず、もっぱら「地誌的研究」へと地理学を傾斜させていった。だが、デュルケームによって放たれた地理学への批判の矢は、フェーブル(Lucien Febvre)による「ラッツエルの地理学だけが地理学ではない」[9]との言明にもかかわらず、決して地理学が克服したものとはいえない。しかし現在は、フェーブルのような「地理学か社会形態学か」といったとらえかたはみられない、むしろ地理学は社会学との連帯のもとで、地域研究を行おうとしている。最近、地理学で方法論的問題を扱う場合には、ソール(Max Sorre)やショレー(AndréCholley)に象徴されるように、積極的に社会学の研究方法をとり入れながら研究を進めようとしているのである。[10]

現在、社会学の諸分野のうちで、地理学とその研究対象を大きくオーバーラップさせているのが、「都市」や「村落」を研究対象とする「地域」社会学であろう。アメリカにおいて地理学と社会学とはフランスとはいささか異ったかたちで、一層密接な関係をもつにいたった。むしろ「フランスにおいては地理学が、アメリカにおいては社会学者によって探究されている分野を広範におおっている」[11]といえよう。アメリカで地理学と社会学との交錯の契機をなしたのが、パーク（Robert E. Park）による人間生態学（Human Ecology）を方法論とする都市研究が提唱されたことである。[12]人間社会を生態学とのアナロジーによって把握しようとする人間生態学は、その後バージェス（E. W. Burgess）やマッケージー（R. McKenzie）によってさらに発展されながらも、もっぱら都市を中心に研究が進められてきた。しかしながら、都市や村落を共棲（symbiosis）にもとづくコミュニティ（Community）として捉える人間生態学理論は、向心（centralization）、集中（concentration）、代置（succession）、侵入（invasion）、傾度（gradient）等の諸概念ばかりでなく、その理論的支柱をなすコミュニティ＝ソサエティの図式にすら、さまざまな疑問が提出された。[13]

こうしたなかで、アメリカの都市研究は地理と密接な関係をもった人間生態学から次第に離れ、「社会心理学」や「文化人類学」との接合を求めていった。しかしわれわれは人間生態学のなかに、地理的なものを手がかりとして社会的現実に迫ろうとする社会学の研究を見出すことができるのである。

地理への関心は、社会学ときわめて密接な関係にある「文化人類学」においてもみられる。人類学者がある特定の社会に着目する時、彼の視野のなかに、その社会を外枠から規定している領域の地理的特性が入り込んでくる。このため民族学、社会人類学、文化人類学等さまざまな名称をもっていいあらわされるこの学問には、なんらかのかたちで地理との関係が入ってこざるを得ない。文化人類学においても、文化の位置する場所の環境を手がかりとして文化・社会を理解しようとする動向があった。ボアス（F. Boas）、ウィスラー（C. Wissler）、クローバー（A. L. Kroeber）等の「文化領域説」（Cultural Area）には、こうした考えが滲み通っている。文化領域はワーグナー（P. L. Wagner）とマイクセル（M.

W. Mikesell) によって指摘されているように、地理学的にいえば地域 (Region) であった。[14] ここでは文化領域説の発展、崩壊が、地理学の展開にとってもきわめて示唆に富むものであることを指摘するにとどめて、次に、地理学としばしばもっとも密接な関係にあるといわれてきた歴史学との関係をさぐってみよう。

歴史学にとって、地理的知識は歴史過程の叙述に欠くことのできないものである。しかし地理学のもつ理論的曖昧さにもまして、歴史学がたとえ理論構成と無関係なものでないにしても、きわめて強く記述科学として成立していることがあいまって、歴史学は地理的知識の組織的な導入にはさほど関心を示してこなかった。多くの歴史書が、その通史の第一章を、歴史の舞台としての地理にその説明をあてることはあっても、全篇に第一章で叙述された地理的要因との関係が、貫徹することはまれである。にもかかわらず、地理的要因は時として歴史の決定的な説明枠として使用された。ブロック (Marc Block) はいう。「物理的自然が人間活動におしつける諸条件は、たといそれがわが国の農業史の根本特徴を説きあかすことができるとは決して思われないにしても、地域間の差異を説明することが問題になるときには、すべての権利を回復するからである。いつか、一層進歩した研究が必らず行うであろう重大な修正点がここにある」[15] と。

地理学と歴史学という二つの科学にあって、相手の知識の組織的な導入に積極的であったのは地理学であった。地理学は歴史を扱うかなり大きな分野として、歴史地理学 (Historical Geography) という研究分野すらもっている。しかしイースト (W. G. East) やダービー (H. C. Darby) 等の歴史地理学の模索的試みにもかかわらず、地理学と歴史学との論理的連関は決して明らかではない。むしろ歴史地理学の内実は地理的叙述を多く含んだ歴史か、ある特定の時代に焦点を合せた「地誌」のどちらかであった。

だが、こうした事態にもかかわらず、歴史学は後述するように、やはり地理学にとってもっとも密接な特殊な位置にある隣接科学なのである。

ともあれ、われわれは経済学、社会学、文化人類学、歴史学等の社会諸科学において地理がどのような点から問題とさ

れ、扱われてきたのかを問題としてきた。しかしこれらの諸科学において、ここでとりあげたような「地理的なもの」に関心を払った研究は、それぞれの科学にあって決して大きな位置を占めることはなかった。むしろ、これらの諸科学はその発展過程で、それぞれの科学の方法的純化へと進んで行き、地理的要因と社会との関係は明確に位置づけられることなく、その場その場で処理されていった。しかしだからといって地理学が、これらの社会諸科学によって捨象された社会現象の地理的側面に着目することで、これら社会諸科学と並ぶほどの社会的現実に対する説明力をもっていたわけでもなかった。

地理学はその実質的研究の累積とは裏腹に、方法論的には一種の閉塞状況にあるのである。

註

(1) Y. Lacoste, *op. cit.*, 前掲書　二六〇頁

(2) 玉野井芳郎「ドイツ経済学の伝統—空間とリージョナリズム—」『思想』岩波書店　一九七四　一二月号　一—二頁

(3) バートンも経済学におけるアングロ・サクソン的偏奇が、経済活動の空間的側面の無視にあることを無視している。I. Burton, The quantitative Revolulion and theoretical Geography, *The Canadian Geographer*, 1963., 野間三郎訳「計量革命と理論地理学」野間編　前掲書　六七頁

(4) André Marchal, *l'Europe Solidaire*, 1969., 赤羽祐・水上万里夫共訳『統合ヨーロッパへの道—EECの政治経済学—』岩波書店　昭和四四　七二頁

(5) 福富正美編訳『アジア的生産様式論争の復活』未来社　一九六九

(6) V.A. Anuchin, Theory of Geography, Richard J. Chorley (ed.), *Direction in Geography*, Methuen & Co. Ltd., London, 1973., pp. 43-64, Gerhard Schmidt-Renner, Elementare Theorie der Ökonomischen Geographie, *Aufriß der Historischen Ökonomischen Geographie*, 1961., シュミット=レンナー　経済地理学研究会訳『経済地理学基礎論』古今書院　一九七〇 Alfred Schmidt, *Der Begriff der Natur in der Lehre von Marx*, 1962., シュミット　元浜清海訳『マルクスの自然概念』法政大学出版会　一九七二　マルクス主義の地理学の動向を紹介したものとして、Ivan M. Matley, The Marxist approach to the geographical enviroment, Wayne K. Davis (ed.), *The Conceptual Revolution in Geography*, University of London Press, 1972., pp. 77-130.

(7) 飯沼二郎『風土と歴史』岩波書店　一九七〇　玉城哲『風土の経済学—西欧モデルを越えて—』新評論　一九七六

(8) およそデュルケームの社会学と対照的性格をもつM・ウェーバーの理解社会学においてすら「地理」との関係が位置づ

けられていることについては、拙稿「比較都市社会学とM・ヴェーバーの都市論」『哲学』第六四集　三田哲学会　一九七六　六八頁　を参照してほしい。

(9) Lucien Febre, *La Terre et l'Evolution Humaine, Introduction Géographique à l'Histoire*, 1922., フェーブル　飯塚浩二訳『大地と人類の進化―歴史への地理学的序論―』上巻　一〇三頁

(10) Max Sorre, *Recontres de la Geographie et de la Sociologie*, Marcel Reviére, 1957., 松田信訳『地理学と社会学の接点』大明堂　昭和四三年　六七―九一頁 André Cholley, *Géographie et Sociologie, Cahiers Internationaux de Sociologie*, V, 1948., ショレー　山本・正井・田中共訳『地理学の方法論的考察』大明堂　一四七―一六二頁

(11) Paul Claval, *Essai sur l'Evolution de la Geographie Humaine*, クラヴァル　竹内啓訳『現代地理学の論理』大明堂　昭和五〇　一九五頁

(12) バーローズ（Harlan H. Barrows）の地理学と人間生態学を同一視する見解に対して、パーク自身は地理学と生態学を区別していた。E. C. Hughes, (ed.), R. E. Park, *Human Communities—the City and Human Ecology*, The Free Press, N. Y., 1952., p. 155.

(13) アリハンやファイアレーの批判によって人間生態学は、その根底から瓦解されたといっても過言ではない。Milla Alihan, *Social Ecology—a critical analysis—*, Columbia University Press, 1938, N. Y., Walter Firey, *Land Use in Central Boston.*, Cambridge: Havard University Press, 1947.,

(14) Philip L. Wargner & Marvin W. Mikesell, *Readings in Cultural Geography*, The University of Chicago Press 1962., p. 9.

(15) Marc Block, *Les caractéres originaux de l'histoire rurale française*, Oslo: Ashehoug & Co., 1931., マルク・ブロック　河野・飯沼共訳『フランス農村史の基本的性格』創文社　昭和三八　六頁

三　地域研究の二重性と地理学の「認識根拠」

われわれはこうした事態に直面して、地理学の発想の原点にたち帰ってみる必要があるだろう。

人間は大地に居をかまえ、大地を基盤としてのみ生活を営むことができる。人間の生活はそれがいかに「主体的」なものであったとしても、それは必ず活動の舞台となっている大地を対象化して行われている。したがって、人間は個人的に

も社会的にも、意識するにせよしないにせよ、何らかのかたちで大地と関係を結んでいる。しかも大地は決して均質なものではなく、さまざまな特徴をもって広がっている。

そして大地との関係における人間活動の空間的広がりが、「地域」をなすのである。つまり人間は、地域においてのみ自己の生活を再生産する社会的存在としての人間となっている。ここに、人間と自然とのさまざまな関係をテーマとする地理学の成立根拠があるとともに、社会諸科学が「地理」を無視してはトータルな社会的現実を理解することができない理由が存在する。(1) そしてこの点では、「歴史の当事者であり創造者である人間が、無機的および有機的な自然にたいし、物理学的および生物学的な自然の多様な諸要因にたいして、営みつづけている複雑な関係を、この関係の継続期間中の各瞬間において、把捉し解明すること、これが人文的な諸問題および研究に適用された場合における地理学の固有の役割である」(2)とした、フェーブルの見解は正鵠を得たものである。

ところが、長年地理学者を悩まし続けてきたのは、巨視的には生活が営まれている場所の地理的特性との関係の所産だと思われた社会現象の諸側面が分析が進んでいくにつれて、経済学的、社会学的、歴史学的な問題として捉えられることである。

たとえば、ある場所でみかん農園が経営されているとすると、そのみかんの木の栽培を規定しているのは大地の自然地理的関係との所産であるばかりでなく、経済学的、社会学的、政治学的なものとの関係の所産だということである。換言すると、ある家族がみかんの木を栽培できる土地に住んでいるなら、その家族が実際にみかんの木を栽培するかどうかは経済的、社会的、政治的問題だということである。そしてこのことが地理学にとって問題なのは、みかんの木の栽培に適合的な大地の自然地理的特性から、実際にそこでみかんの木が栽培されるかどうかを、演繹できないことである。古来くり返し主張されてきた「地理学的決定論」が成立しない理由がここにある。地理学者は地理学的決定論といった巨視的なそれでいて単純な論理から、何らかのかたちで別の論理を導入しなければならない。しかし地理学の研究にこうした論理

を導入することは、地理学の研究がその固有の対象とした地域から離れていくことを意味した。

先に指摘した文化人類学で、文化領域説が崩壊した理由もまたここにあった。このことについて岩田慶治は次のようにいう。地表空間のデザインから文化研究を試みる文化領域説がより詳細になり、「文化の空間的ひろがりから文化の様式の探究にと研究の焦点を移動させていくにつれて、研究者の関心は次第に一本のヤシ・一本の喬木に移ってしまった。〈地(じ)〉のパターンではなくて〈柄〉のパターンに関心が集中することになった。つまり〈地〉を忘れたのである。」研究が「詳細になればなるほど環境との関係は文化のうちに取り込まれて、場としての本質は切り捨てられていった」[3]のである。

地理学にとって固有の研究対象であると思われた地域は、分析が進むにつれて経済学、社会学、政治学等の社会諸科学の分析枠組のなかに拡散してしまう。「諸学の母」としての地理学は今や抜け殻になろうとしている。

地理学は地域の総合科学だといわれてきた。地理学者はこの「総合的」であることとを誇りとしてきた。しかし地理学の困難は、地理学がその固有の分析的性格を維持したまま諸命題の論理的展開ができないことである。いかに地理学が「総合的」であることを誇っても、分析を進めることなく「総合」を行ったのでは、その総合は「常識」とそれほど違ったものとはならない。地理学者が研究を進めるためには、どうしても研究対象となっている地域の経済的、社会的、政治的特性に着目せざるを得なかった。この点が、ラコストによって「地理学者は、はなはだみすぼらしい地質学者であり、そしてはなはだ凡庸な経済学者である」[4]と、告発されたところである。だが、ガルニェ (J. Beaujeu-Garnier) の主張するように、「もし地理学が純粋な人口学的テクニックを採用すれば、地理学は地理学であることを放棄する」[5]こととなる。かといって、地理学者が地理学のこうした性格を無視して、社会現象を地域の自然地理的特性からいきなり分析することは、悪名高き「地理学的決定論」に逢着することを意味した。ここに伝統的地理学の困難があった。

こうしてみると、現実の人間生活の場たる地域は経済学、社会学、政治学、人口学、歴史学等の諸科学によって、研究

し尽されるべきものであろうか。地理学は単に問題提起の科学にとどまるのだろうか。地理学的分析の延長線上に出てくるのが、他の社会科学的分析の問題となっていくことが長年地理学者を悩ましつづけてきたとともに、地理学の理論展開を妨げてきたのである。だが、もし地理学が自己が提起した問題を自己の保有する分析枠組で解くことを放棄せざるを得ないとするなら、地理学はその根底から瓦解することになるだろう。こうした事態を、ラコストは『シャトレ（Chatelet）哲学史』のなかで次のようにいう。「地理学から出発する場合には、社会的現実は姿をくらましているように思われる。社会科学から出発する場合には、地理学は消滅してしまうように思われる。しかし、地理学とは一体何なのであろうか」[6]と。

次に、われわれはラコストのこうした問題提起を受けて、地理学の立場から社会的現実に迫ろうとする方法と他の社会諸科学から社会的現実に迫ろうとする方法とを、同じ「地域」に舞台を求め、ここでの検討を通じて地理学の学問的性格を論じてみよう。

これには何よりも、地理学のもつ論理構造を明らかにする必要があるだろう。ここで重要な意味をもってくるのが、人間が大地を舞台としてのみ生活を営むことができる以上、現実の生活の場である地域は、経済学、社会学、政治学等ほとんどの社会科学の研究の舞台でもあるということである。そもそも経済学、社会学、政治学等の諸理論も、研究者が地域で生み出される社会現象に着目し、ここにそれぞれ経済的、社会的、政治属性を想定することで、社会現象の因果連関を求めて論理整合的に展開したものである。これら社会諸科学において、近代科学の特徴である「経験性」が強調されればされるほど、社会現象を、その具体的な発生の場である地域で捉えようとする研究は活発になる。これに対して、地理学における地域研究はこれらの社会科学のものとはいささか異なったものである。地理学における地域研究は、明確に地域を基盤とし、この地域の「地域性」に地理学的属性を想定することによって、社会現象の因果連関を求めるのである。

こうしてみると、現実の生活の場たる地域は、研究者にとって地域性への因果連関の有無によって、「二重の性格」を

もって現われるであろう。従来の研究は、地域研究のもつ、この二重の性格を見落してきた。[7] この結果、地域研究は地理学によるものも、他の社会諸科学によるものも、きわめて曖昧なものとなったのである。[8] 地域研究の二重性は、地域での人間生活が「自然」と「他の人間」との二重の関係をとり結ぶことから生み出される。換言すると、地理学の研究は人間が生活を営む過程でとり結ぶ「自然」と「他の人間」との二重の関係のうち前者に着目して分析の焦点を合わせるのに対し、他の社会諸科学の研究は後者、すなわち人間と他の人間との関係に着目して展開する。ブラーシュ（Paul Vidal de la Blauch）の「地理学は場所の科学であって、人間の科学ではない」という周知の命題も、この意味で解さなければならない。

つまり地理学は明確に地域を基盤とし、地域の「地域性」に地理的属性を想定することによって、社会現象の因果連関を求めるのである。これが地理学の「認識根拠」をなすとともに、地理学の学問的性格を特徴づけているところなのである。

しかしここで注意しておかなければならないのが、経済学、政治学、社会学等による地域研究においても地理的属性に社会現象の因果帰属を行うし、地理学による地域研究においても経済学的、政治学的、社会学的属性に因果帰属を行うことである。だが、ここでの因果帰属は、それぞれの科学に固有な分析枠組に外在するものとしての地理学的属性に対してである。いい換えると、経済学、社会学、政治学等にとっての地域は、社会現象がただ単にそこで生じているという意味での場にすぎない。したがって、これらの諸科学で理論構成が順調になされる時、社会的現実のなかに存在する地理の問題はさしたる意味をもち得えない。二章で述べた社会諸科学における「地理学派」の抬頭は、これら諸科学の分析装置の枠外に置かれた社会的現実に新たな意義が認められ、これが地理的属性と深くかかわっていると考えられた場合であった。同様に、地理学においても、分枠の枠外に置いた経済学的、社会学的、政治学的属性に因果帰属を行う。しかしながら、地理学においては社会現象の因果関係が一貫して地理的属性に方向づけられ、連関が試みられている点で、他の社会

諸科学の地域研究とは決定的に異なるのである。(9)

ここで問題となってくるのが、地理学にとって、その学問的中核をなす「地理学的属性」の内容であろう。地理学的属性とは、一体どのようなものであるのだろうか。

地理的属性は当然大地の自然地理的性格と密接な関係をもつものである。しかしここで重要なことは、地理的属性の内容をなす自然は決して「生の自然」ではないということである。歴史学が他の諸科学にも増して地理学と密接な関係をもつのは、地理学にとって学問的な中核をなす地理学的属性に関してである。人間がその社会生活を営むなかでとり結ぶ自然とは、人間が過去の社会生活の営みのなかで加工し続けた「加工された自然」だということである。それぞれの地域には、常にそれに先立つ時代に加工された自然があった。しかし自然は、決して加工し尽すことができないという点で、普遍的に地理学の認識根拠の中核となることができるのである。つまり地理学的属性の内容をなす自然は、大地の自然地理的性格と密接な関係をもつものではあっても、それ自体すぐれて歴史的・文化的所産だということである。そしてこの点にこそ、ブラーシュが地理学を、ラッツェル流の類的進化によって構成された「歴史」から離れて、語の本来的意味での「歴史」に接合させたことの意義が存在するのである。

だが、地理学的属性の内容をなす自然が歴史的なものであるからといって、人間とこの自然との関係を歴史過程に解消することはできない。加工された自然の形成され方と、その機能はあくまで別である。

歴史的に形成されたものとしての自然に地理学的属性を想定することは、この属性が経済学的、社会学的、政治学的性格をもつことを意味するだろう。しかし地理学的属性の経済学的、社会学的、政治学的性格は、決して先に取りあげた社会諸科学における経済学的、社会学的、政治学的属性と同じものではない。ここでの地理的属性のこうした性格は、人間にとって所与のものとして存在する「加工された自然」のもつ経済学的、社会学的、政治学的性格にほかならない。地理学における属性がこのように複合的性格をもつことが、地理学の研究を必然的に総合的なものとしているのである。

註

(1) もちろんこの立場は、ハーツホーン流の地理学の研究を「地球上の地域的相異」だとする見解を包摂している。Richard Hartshorn, *The Nature of Geography—A Critical Survey of Current Thought in the Light of the Past—*, 1939., ハーツホーン　野村正七訳『地理学方法論』朝倉書店　昭和三二　二一頁

(2) Lucien Febvre, *op. cit.*, 前掲書　上巻　一二二頁

(3) 岩田慶治「コスモスとしての世界—(中)—」『思想』岩波書店　一九七三　九月号　六五—六六頁

(4) Y. Lacoste, *op. cit.*, 前掲書　二五〇頁

(5) J. Beaujeu-Garnier, *op. cit.*, 前掲書　一六頁

(6) Y. Lacoste, *op. cit.*, 前掲書　二七二頁

(7) 本稿とほぼ同じ視点から社会学の地域研究を模索したものとして、拙稿「地域社会学の方法と構想」共著『都市化と地域社会』時潮社　昭和五三　一—三八頁を参照してほしい。

(8) 経済学、社会学、政治学等の地域研究もまた同様の問題に突きあたり、方法論的にはきわめて曖昧なものとなっている。

(9) ここでの因果連関の概念は、社会現象の因果関係を特定の属性にかかわらせて分析する、という意味に解されたい。したがって、因果関係を行うことが因果帰属をを伴うとはかぎらないのである。この点では、本稿が多くの点でM・ウェーバーに依拠しながらも、彼の用語法とは異なる。こうした特殊な用語法を採用した事情については、いずれ稿を改めて論じたい。

四　地理学の「存在根拠」と地理学理論の若干の性格

前節でわれわれは、地理学の認識根拠を、明確に地域を基盤とし、この地域の地域性をなす地理的属性に社会現象の因果連関を置くことに求めてきた。しかしこのような認識根拠が、そのままのかたちで地理学の「存在根拠」となるわけではない。地理学者は何よりも、この認識根拠にもとづいて、地理学者の存在根拠を主張するため、地域に関するさまざまな知識を駆使して「経験的」な理論を構成しなければならない。そしてこの経験的な地理学「理論」の開示する意義が、われわれにとっての地理学の「存在根拠」となっているのである。このために地理学者は自然科学、社会科学を問わず多様な科学に通じなければならないし、地域に関するおびただしい知識を累積しなければならない。地理学者が、一見何の価値があるかわからないほど、瑣末なまでに微細な知識にこだわるのも、こうした知識の蓄積のためだった。地理学者独特の

こうした知識を蓄積する方法が、「地図」を描くということであった。そして地域に関する無数の資料を地理学の認識根拠にもとづいて、分析し総合することによって、どこまで地理学の存在根拠を主張できるかが、地理学者の能力となっているのである。

このようにして生み出される地理学理論は、一体どのような性格を示すのだろうか。

この場合地理学の地域を基盤として、人間の社会生活を探究する「居住者としての人間」という考え方は、決してラコストが危惧するように、人間の《生産者としての人間》や《消費者としての人間》といった性質を覆い隠すものではない。[1] むしろ、地理学の居住者としての人間という考え方は、人間が生存するうえで欠くことのできない「居住」という事実を基底に据えて、人間の生産者としての側面や消費者としての側面に新たな意義を見い出そうとするものなのである。

この際、地域生活を営むことが、人間にとって究極的には類的な問題にかかわっているとしても、人間の生み出す社会現象に自然科学的な「法則」を想定することの有効性は疑わしい。人間は「生物」や「動物」といった概念で包摂される概念ではあっても、社会的存在としての人間を、生物や動物としての人間に貫徹する類的な「法則」から説明することはできない。「自然科学にとって『法則』は普遍妥当的であればあるほど愈々重要であり、価値に富むのであるが、その具体的前提における歴史現象の認識にとっては、最も普遍的な法則はその内容が最も空虚であるから通常価値が乏しい」[2]のである。

およそ人間の創り出す社会は、家族からさまざまな中間集団を経て民族や国家、世界に至るまで、実にさまざまなレベルで地理的属性とかかわっている。しかしこれらの社会的形象のうち、どれが、どのようなかたちで問題となってくるのかは、当該社会の歴史的・文化的状況によって規定されている。ここに歴史学が、人間が大地において生活を営むことができるという普遍的な関係に着目するところに、その学問的基盤が設定されているのにもかかわらず、それぞれの社会の枠内においてしか研究の対象とならない理由が存在する。つまり人間生活は、「類」としての人間を基礎として営まれ

るにもかかわらず、これがわれわれにとって考察の対象となるのは、それがもつ歴史的・文化的意味においてなのである。

古来、大地の自然地理的特性から社会「法則」を演繹することが盛んに行われた。もしわれわれがこうした自然科学的法則の社会への貫徹を見い出すことができたとしても、われわれはこの法則に、はたしてどれほどの意味を認めることができるだろうか。たとえ可能であったとしても、大地の自然地理的性格から直接「国家」の性格を論じる如きはこの例であろう。地理学的決定論が行きづまった理由もここにあった。自然は人間にとって所与のものとして現われるにもかかわらず、われわれの賦与する社会的・文化的脈絡を介してのみ、地理学が対象とする「自然」となるのである。

こうしてみると、現在の地理学に地域現象を一気に説明する理論があるとは考えられない。かといって、無数の個別記述からなる事例研究の蓄積が、おのずと地理学理論を構成するわけでもない。

われわれの課題は、経済学的、社会学的、政治学的属性を、大地の自然地理的性格に連関させて歴史的・文化的な地理学的属性とすることである。地理学の認識根拠は何よりも社会現象の因果関係を、複合的なこの地理学的属性に連関させるところにある。この際、われわれは地域で生活を営む人間に、Homo Geographicus といった「理念型」(Ideal Typus) 的概念を想定せざるを得ない。だが、この Homo Geographicus が自然とのかかわりのなかで、生活を営む歴史的・文化的人間である以上、畢竟フェーブルが危惧したようなアングロサクソンの経済学における Homo Economicus といった、単一で抽象度の高い人間類型とはなり得ない。(3)

それにしても、地理学は実に数多くの研究分野をもっている。文化地理学、社会地理学、経済地理学、政治地理学、あるいは農業地理学、工業地理学、はたまた村落地理学、都市地理学等、思いつくままにとりあげても、実にさまざまな研究分野が存在している。たとえば、みかん栽培といった社会現象は、農業地理、経済地理、村落地理等、さまざまな分野から研究することができるだろう。だが、農業地理と経済地理と村落地理とは密接な関係をもつものではあっても、あく

まで分析のレベルが違っている。研究にあたってこれらの分析装置のうち、どの装置に他の装置を統合していくのかは、われわれが直面している社会問題に対して、これらの分析装置が開示する意義にしたがって決められることなのである。

次に、われわれは、地理学が好んでとりあげてきた「地域区分」の問題を、地理学的属性との関連でとりあげてみよう。地理学者は地域区分を通じて、さまざまな地域類型を設定してきた。この場合地理学が、もっともしばしばとりあげてきたのが自然条件の差異にもとづく地域区分であった。とはいっても、気候・地形・地質等の自然条件の違いが、そのままのかたちで地域区分になるわけではない。ここに、地理学による地域区分の困難があった。もっとも、地域区分そのものは、地域での生活の多側面性に関連して、論理的には観点の数だけ可能だろう。だが、地域区分を行う観点がどのようなものであったとしても、そこには何らかのかたちで社会関係が領域的広がりのなかで変化していることが措定されている。換言すると、地域区分がたとえどんなに相対的なものであったとしても、そこには社会関係の「開放・閉鎖」が想定されているのである。

ここで注意しなければならないのは、社会関係の開閉は自然条件によっても、社会条件そのものによってもなされ得ることである。自然条件による社会関係の開閉は、自然条件が当該地域で生活を営む人間の社会的行為を条件づけることによって生み出される。地理学が好んで指摘してきた自然条件の差異による地域区分は、この点に着目したものである。他方、これとは別に、地理学者の地域区分をやっかいなものとしてきたのが、社会関係の開閉がその地域の人間の社会関係そのものから生み出されていることが多いことである。つまり社会関係が、当該地域で生活を営む人間の社会的行為を条件づける場合である。特定の社会的条件が長期にわたって一定の領域に社会関係の閉鎖をもたらすとき、その領域を生活空間とする人間はよってたつ大地との関係で独自な地域を形成する。古い行政区画が、しばしば地域区分のために用いられるのはこのためである。行政上の形式地域（Formal Region）が実質地域（Substansive Region）に転化するのは歴史上しばしばみられたことである。したがって、地理学における地域区分はさまざまな観点から、自然条件とこれとはい

ささかレベルを異にする社会的条件によってひき起される社会的行為との関係で論じられるべきものである。

こうしてみると、地理学の対象は社会学の一分野である地域社会学と大きく交錯してくる。かつて行われた地理学と社会形態学を奉じるデュルケームとの論争もここから起った。しかし地理学と地域社会学との相違は、それぞれの科学で累積されてきた現実を捉える視点と概念装置の相違に帰着するのであって、その科学としての成立根拠を異にしているわけではない。

註

(1) Y. Lacoste. *op. cit.*, 前掲書　二六九頁

(2) Max Weber, Die »Objectivität« sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis, *Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftlehre*, 4Aufl., J. C. B. Mohr, Paul Siebeck, Tübingen 1973, SS. 179-180., ウェーバー　富永祐治・立野保男共訳『社会科学方法論』岩波書店　五七頁

(3) Lucien Febvre, *op cit.*, 前掲書　上巻　二六八頁　三〇二頁

五　結　論

現在、地理への関心は益々高まっている。農業経済学は絶えず農業における自然の意義を強調してきたし、「風土論」は和辻以来たびたびむしかえされて今日に到っている。人々は現代社会に内在する社会問題を解決するため、その期待の一端を常に地理学に寄せてきたといえよう。最近では一種の閉塞状況を呈してきた社会諸科学が、伝統的に地理学が扱ってきた「地域」に視点を据えることによって、新たなる展開の途を探ろうとしている。(1)

しかしこれら社会諸科学よりも一歩先に、一種の閉塞状況に陥っていた地理学は、逆にこれら社会諸科学との積極的な交流を通じて、急速に変化してきた。この点では、バートン (I. Burton) の指摘するように、「地理学はこれまで永らく『先駆的』というよりは『追随的』な学問であった」(2) といえるだろう。とりわけ計量地理学は、現実社会の要請に答えながら、最近急速に発展してきた。こうしたなかで、計量地理学も一つの問題に突きあたる。このことについて高阪宏

行は「ランダム・パターンはランダム・プロセスに基づいて発生したものであるが、それでは考察している空間的パターンはどんなプロセスによって生じたのであろうかということである。したがって空間的パターンをさらに深く考察するのには、その根底に横わっているプロセスを吟味しなければならずさらに、そのようなプロセスはランダム・プロセスといった数学的プロセスで理解されるものではなく、空間的プロセスとして理解されるものでなければならない」[3]として、「その場合必要とされる空間概念は、容器としての絶対空間ではなく、研究される事象に基づいて座標系が決定される相対的空間のそれである」[4]というのである。

しかしこの相対的空間こそ、地理学が伝統的に「地域」として描き出してきたものである。こうしてみると、計量地理学は従来の地理学と、その視点といい、分析方法といい著しく性格を異にするとはいえ、伝統的地理学が突きあたっているのと同様の問題にたどりついているといえよう。[5]

かつて、地理学にも深い関心を抱きながら壮大な社会学を構想したソローキン（Pitrim Sorokin）は、社会学の研究に欠くことのできない分野として、社会現象を非社会的環境（地理的・生物学的・その他）との関係で考察することをあげている。[6] この意味では、地理学研究の必要性はいくら強調してもし過ぎることはない。だが、「ある地理学者が《地理的》とみなしている方法に従い、彼にとって重要である経済的、社会的、政治的諸現象を把握するためにある一定の空間にかかわる場合、これらの現象の大部分はあたかも、捉えがたい理由によって、彼から逃れてしまうように、あるいは非常に歪められた様相において彼に示されているかのように、万事が運んでいるように思われる」[7]のである。

こうした事態に対して、地理学的環境論は、「諸学の発展によって危機にさらされていたかにみえた地理学の統一を再建した。[8]」だからこそ、地理的決定論を武器とした環境論がその論理的誤謬にもかかわらず、「地理学に因果関係による首尾一貫した説明を長い間可能にした唯一の理論として人文地理学の歴史において中核的な位置を占め続けた」[9]のである。

フェーブルの指摘するように、「人々と自然環境との間隙には、思想（イデー）がある、しのび込む思想が常にある。人文事象は

生のままの事象ではない。他方、自然事象は決して、純粋に機械的な、盲目的な、そして運命の印をきざみつけられた影響を人々の生活に及ぼしはしない[10]」のである。つまり人間は意識するにせよ、しないにせよ「思想」を媒介としてのみ自然や社会の問題を論じることができる。しかもこうした思想は文化、国家、集団等によって異なっている。地理学者にとって、この思想をどのレベルで受け止め研究対象を見い出していくのかが、研究自体を大きく規定するものとなってくる。この点では、シェーファーがハーツホーンを告発した際に Wissenschaft と Science との間にある微妙な、それでいて無視することのできない溝渠が存在していることを指摘したことは、注目に価する[11]。ハーツホーンはドイツの「地理学思想」をあまりにも単純に、アングロ・サクソンの地理学思想に流し込んでしまった[12]。地理学の研究は何よりも、この多様な地理学思想に繋ぎ止められなければならない。

本稿はこうした点を踏まえて、従来行われてきた地域研究にその「二重性」を指摘し、地理学の「認識根拠」と「存在根拠」を区分することによって、地理学に新しい理論展開の地平を切り拓こうとするものなのである。こうしてみると地理学理論の構築はきわめて複雑なものとなるし、その途は遠く困難である。とくに地理学の場合、リグリー（E. A. Wrigley）の指摘するように、自然地理学と社会地理学の科学的性格を異にする二つの部門を車の両輪としているだけに、理構構成は一層複雑なものとなる[13]。しかし自然地理学と社会地理学の「分裂に対する恐怖から、多くの地理学者は現実を直視しようとしない[15]」なら、「地理学、こんなものは何にもならない[15]」とまで極言したラコストの疑念は決して拭い切れないものとなるだろう。

ラコストのこうした言明がどのような立場からなされたものであるのかは別にしても、「危機を作り出す多様な諸矛盾の錯綜する《空間》の把握を可能にするような概念装置の方法論的構築を企てることが、現代の全体的危機の発展につれて、ますます不可欠なこととなっている[16]」。地理学はこのために、さまざまな理論を準備しなければならない。水津一朗はこうした事態を、現実の地理的発見の時代に次ぐ、「第二の地理的発見の時代」と呼ぶ[17]。そしてこの第二の地理的発見

の時代こそ、とりもなおさず「地域」の地理学的発見の時代なのである。

註

(1) 玉野井芳郎・清成忠男・中村尚司共編『地域主義』学陽書房　昭和五三

(2) I. Burton, *op. cit.*, 前掲書　五〇頁

(3) 高阪宏行「計量地理学の方法論的諸問題—空間的パターンから空間的プロセスへ—」『地理学評論』　四八巻　八号　一九七五　五三二頁

(4) 高阪宏行　前掲書　五三四頁

(5) 行動科学は地理学だけでなく社会科学の幾多の分野で数多くの成果をあげている。しかしながら、行動科学は人間の内面を直接的には問わないことで、従来の社会科学とは異質なものとなっているとともに、この点が行動科学による研究を大きく制約するものとなっているといえよう。

(6) Pitrim A. Sorokin, *Contemporary Sociological Theories—through the first quater of the twentieth century*—, Harper &Row, N. Y., 1928, p. 760.

(7) Y. Lacoste, *op. cit.*, 前掲書　二七二頁

(8) Paul Claval, *op. cit.*, 前掲書　六一頁

(9) *Ibid.*, 前掲書　六六頁

(10) Lucien Febvre, *op. cit.*, 前掲書　下巻　二七三頁

(11) F. K. Schaefer, *op. cit.*, 前掲書　二八頁

(12) この点については稿を改めて論じたいと思っているが、とりあえずは、拙稿「アメリカの社会研究と都市社会学」日本都市学会編『都市自治をめぐる学際的研究』地人書房　一九七九　一八五—一八六頁を、参照してほしい。

(13) E. A. Wrigley, Changes in the Philosophy of Geography, R. J. Chorley & P. Hagget (ed.s), *Frontiers in Geographical Teaching*, Methven & Co. Ltd., London, p. 5.

(14) Paul Claval, *op. cit.*, 前掲書　一九二頁

(15) Y. Lacoste, *op. cit.*, 前掲書　三〇〇頁

(16) *Ibid.*, 前掲書　三〇九頁

(17) 水津一朗『社会集団の生活空間—その社会地理学的研究—』大明堂　一九六九　四四六頁

（なお本稿は一九七八年四月四日、日本大学で開催された日本地理学会春季学術大会での発表用草稿に加筆、補正したものである。）